

東京で角膜炎など集団感染発覚

レーシック手術安全に取けるには

レーザー光線を使って視力を回復させる「レーシック手術」をめくり、東京都内の眼科診療所でこのほど、器具の滅菌が不十分だったことが原因とみられる角膜炎などの集団感染が発覚した。同手術は眼科手術の中では比

較的簡単とされている上、痛みが少なく短時間で済むため、ここ数年で急速に広まっている。手術の仕組みや医療機関側の衛生管理、手術を安全に受けるポイントなどをまとめてみた。
(鎌田倫子)

器具の衛生管理必須

指針では眼科専門医

レーシック手術は海外で屈折率を変えることで近視開発され、日本では二〇〇〇年以降に厚生労働省が手術に使用されるレーザー装置を医療機器として承認。その後、一般にも普及してきた。日本眼内レンズ屈折手術学会（東京）によると、手術を受けられる医療機関は全国に二百以上あるとみられ、手術件数は推定で年間四十四万五千件という。

◇価格競争激化

レーシック手術は、レーザーで目のレンズの役割を果たす角膜の一部を削り、

屈折率を変えることで近視や遠視を矯正する。目に痛みを感じないように点眼麻酔をして行い、時間は二十〜三十分。

角膜（厚さ約〇・五mm）は、表面から順に、角膜上皮、ポーマン膜、角膜実質、デス膜、角膜内皮という五つの層で構成。手術ではまず、角膜実質のごく表面までの層を特殊な器具で薄くスライスし、ふた（フラップ）を作る。次にフラップをめくり、角膜実質にレーザーを照射。最後にフラップを元に戻すと、自然に

レーシック手術の器具のパッケージ。感染症予防のため、医療機関では通常、滅菌した日付や効果の期限を記載する方式を採用している＝明石市朝霧台、あさぎり病院

傷から菌が入る可能性も

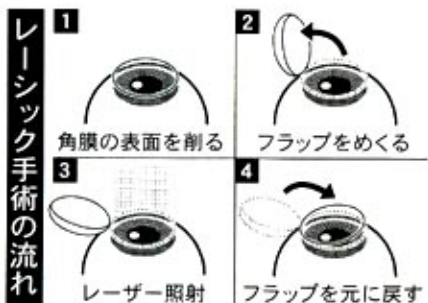
東京都中央区保健所によると、集団感染が判明した診療所では、少なくとも患者六十七人が感染性の角膜炎や結膜炎を発症。医療器具の滅菌不足が原因とみている。問題はこうしたケースがどの程度発生しているかが、厚生労働省医政局指導課は「医療機関側に報告義務がないので、分からない」という。

◇適応見極めを

一方、東京の眼科診療所で手術を担当した医師は、日本眼科学会が認定する眼科専門医ではなかった。同学会のガイドライン（指針）では、角膜の疾患などに精通した同専門医であることが手術担当者の条件に掲げられている。

手術では、角膜の表面に傷を付けるので、細菌やウイルスが入り込む可能性がある。同手術に取り組んでいる、あさぎり病院（明石市）眼科部長の藤原りつ子医師は「細菌などが混入すると炎症を起こし、角膜が白く濁って視力が低下。重症だと角膜移植が必要になる」と解説する。

このため、医療機関では、クリップやコードなどの器具は高温高圧で滅菌し、角膜をスライスする器具については使い捨てにするのが必須。また通常、滅菌に必要な温度に達したことを示すインジケータを導入し、滅菌装置の故障や不具合に備えているという。



レーシック手術の流れ

藤原医師は「感染症が起る一般的な確率は、白内障手術で千人に一人なのに、レーシック手術では五千人に一人。安全性は比較的高いが、リスクはある。また、簡単といわれるが、手術に変わりない。医療器具の十分な滅菌は基本中の基本だ」と話す。

